

## 論文審査の要旨及び担当者

### 論文題名

合戦絵研究—軍記物語の絵画化—

### 論文審査の要旨

本論文は、日本の中・近世合戦図を大きく俯瞰しつつ、軍記物語の絵画化という視点から、近世合戦図屏風における図様の形成と展開・継承を跡づけ論究した労作である。

合戦絵は、合戦を主題とした絵画の総称であるが、従来、「前九年合戦絵巻」「後三年合戦絵巻」「竹崎季長絵詞（蒙古襲来絵詞）」など十三、四世紀の合戦絵巻、あるいは、「関ヶ原合戦図屏風」や「川中島合戦図屏風」といった戦国合戦図屏風に研究関心が集中していた。だが実際には、戦国合戦図屏風の制作とほぼ同時期の十七世紀に、『保元物語』『平治物語』『平家物語』などの軍記物語に材を取る作例、たとえば「一の谷・屋島合戦図屏風」が繰り返し制作され享受の裾野が拡大していたことが、現存作例の数からも確認できる。柳澤氏は、これら近世の軍記物語絵の作例、特に『平家物語』に比べて研究の遅れていた『保元物語』『平治物語』の絵画化作品の調査を積み重ね、物語絵画化の様相、図様の典拠と流布浸透の具体相を丹念に解析した。論文の構成は、序章と終章を首尾においての三章仕立てからなり、第二章と第三章の間に補論を挿入している。以下、これに沿って、議論の大筋を追うこととする。

第一章「『保元物語』『平治物語』の絵画化—近世の屏風作例を中心に—」では、前史となる中世における保元絵・平治絵の制作・享受について、絵巻作例と文献資料を確認した後、近世合戦図の中でも、他に例を見ない壮大な画面構成と岩佐又兵衛様式に通じる表現を有するメトロポリタン美術館所蔵の「保元平治物語図屏風」と、『保元物語』のみを描いて、奈良絵本や絵入り版本の図様との関係を窺わせる岡山県立美術館所蔵の新出「保元合戦図屏風」を主たる対象として、物語の中から描くべき出来事をどのように選択し、画面をどのように構成したかを精緻に分析比較する。両作品とも六曲一双屏風であるが、前者は右隻に「保元合戦図」五十七場面、左隻に「平治合戦図」百二場面を配し、物語のおおまかな内容を辿ることができる、物語に語られた出来事を網羅的に描出する合戦絵であるのに対し、〈岡山県立美術館本〉は、左右隻とも『保元物語』の白河殿の戦いを描き、右隻に六場面、左隻に三場面のみを配するという、特定のエピソードに焦点化した合戦絵である。柳澤氏は、両作品が典拠とした物語本文と図様の対応を丹念に検討し、限られた場面しか選択していない後者が、むしろ複層的な典拠

を背景にすることを説く。近世の『保元物語』『平治物語』の絵画化例として先行する〈メトロポリタン美術館本〉が物語の全貌を統一的に表象するメディアとして一双屏風という大画面を選び取っている一方、これに遅れる〈岡山県立美術館本〉は、奈良絵本や絵入り版本という別のメディアで流通している図様を適宜取捨選択し、それらを迫力ある合戦図像として大画面に展開させるものであったという、両者の対極性をより明快に示すことになった。

本章は、近世の合戦図屏風として先行する〈メトロポリタン美術館本〉が有する出来事の場合の重視、すなわち地理的要素が出来事の時間順を圧倒するという物語表現の特質や、空間の構築における「洛中洛外図屏風」との親近性、後続の合戦図屏風にも継承されていく「六波羅合戦絵巻」という十三世紀絵巻の模本からの図様借用といった指摘によって、〈メトロポリタン美術館本〉を明確に位置づけたのみならず、〈岡山県立美術館本〉そしてこれに類する性格の〈馬の博物館本〉が近世合戦図屏風の一大ジャンルをなした「一の谷・屋島合戦図屏風」と相通じることを示し、第二章へと議論の展開を予期させている。

第二章『『平家物語』の絵画化—近世における「一の谷・屋島合戦図屏風」の生成とその展開』では、近世の平家絵は、①物語の展開に沿って物語を絵画化するもの、②各巻から一場面ずつエピソードを抜き出して描いたもの、③複数のエピソードを配したものの、④合戦シーンに特化したもの、⑤一図に一場面を描いたものに分類できるが、圧倒的に④⑤の作例が多く、しかも屏風作例が多いことを指摘し、その殆どを占める「一の谷・屋島合戦図屏風」の分類と個々の作品の特質を論じ、図様の形成とその継承から、典型の形成とそこからの逸脱についての議論のもとで、平家絵の生成と享受を辿っていく。

第一節では、従来、初期作例の系統として一括されてきた智積院本系統の作例を丹念に比較検討することで、比較的早期に成立した図様構成が、型として繰り返し用いられ、ある種の粉本化したことを推定する。智積院本系統の諸本を対象に、一の谷・屋島合戦のエピソードと描かれた図様との突き合わせを丹念に行いまとめた「智積院本系統『一の谷・屋島合戦図』比較表」は、基礎資料となる成果といえよう。

第二節では、智積院本系統に属さない個人蔵本の画面を、エピソードの描写と図様の型という点から分析し、この作品が既存の図様にとらわれず新たな図様や場面を創造していることを明らかにする。同様に智積院本系統に属さない耕三寺本を取り上げる第三節では、他の「一の谷・屋島合戦図屏風」とは異なる独自性の強い図様の由来を解析し、そこに謡曲や名所図会からの図様創出を見出す。図様や構図を繰り返し転用していく〈智積院本〉系統、絵師が物語を読み解釈して新たな平家絵を創出する〈個人蔵本〉、既存の図様と異なる媒体からのイメージを組み合わせ独自の図様を展開する〈耕三寺本〉という位置づけは明快である。最後に「一の谷・屋島合戦図屏風」が、なにゆえかくまで流行したのかについて、制作と享受の背景を伝来から探り、たとえば加賀藩主の子息が入寺したときの調度とされる〈善徳寺本〉や紀州徳川家ゆかりの〈永寿院本〉などを含め、これら合戦図屏風が武家としてのアイデンティティを表す調度であったことを論ずる。

またこの章の補論「弁慶像から見る『一の谷・屋島合戦図屏風』」では、『平家物語』や『源平盛衰記』にはないエピソードによる弁慶像が、『義経記』や謡曲「安宅」「橋弁慶」に基づく

ものであることを明らかにし、「一の谷・屋島合戦図屏風」のみならず平家絵を広く渉猟し、白頭巾もしくは白鉢巻をした弁慶像のイメージ定着の様相を探っている。

第三章「描かれ続ける合戦—合戦図様の継承と転用—」第一節は、中近世の様々な媒体（絵巻、冊子、障屏画）に描かれた合戦シーンを集め、〈落馬する図様〉〈髻をつかんで首を切る図様〉〈扇を広げる図様〉〈背負われる図様〉など、時代や様式、作品形式、主題などの違いを超えて共通する典型図様の存在を事例に即して検討する。そしてそれらの図様の多くが「平治物語六波羅合戦絵巻」（失われた原本の成立は十三世紀）の模本に見られることを丁寧に示した。「六波羅合戦絵巻」からの図様転用は、いくつかの作品に関してはすでに指摘されてきたところではあるが、本論文では対象を広げ、かつ実際に事例一つ一つをあげて検証していることが評価されよう。なかでも「耳川合戦図屏風」が戦国合戦図屏風でありながら「六波羅合戦絵巻」から多くの図様を転用していることの指摘は、「軍記物語」の絵画化と戦国合戦の記録的図解とを結ぶ論点として、今後さらに検討の対象となるだろう。

また第二節では、中世末の下関赤間神宮蔵「安徳天皇縁起絵」と岡田美術館蔵の「平家物語図屏風」（十七世紀なかば頃）を取り上げ、両作品に描かれた源平合戦について解析する。前者では、「一の谷・屋島合戦図屏風」との図様構成の共通性が指摘され、第二章で導かれた、〈智積院本〉がこの系統の初発例なのではなく、先行する図様が存在したことへと結ばれる。さらに岡田美術館本に対する解析では『平家物語』のテキストに忠実な絵画化が志向されていることを検証している、

このように本論文は、描かれた合戦の記録的側面に向かう傾向があった「合戦絵研究」に対しては、「軍記物語の絵画化」という視点から新たな光を当て、「軍記物語絵研究」という枠を自明視しがちな動向に対しては、「合戦絵」の観点からそれを相対化し位置づけ直す試みとなっている。また、個々の作品に立ち戻って分析を行いながら、検討すべき問題系を紐ぎ出してゆく点にも特徴がある。

基礎研究としては、地道な作品調査の積み重ねの上で、描かれたひとつひとつの場面を、異本を含めた物語本文と丹念に照らし合わせ、また典拠を探る範囲を謡曲や奈良絵本などへと拡大しながら解釈・分析してゆく誠実な研究姿勢が、新出品を含めて合戦絵の作品研究、また物語と図様の相関の仕組みについての研究水準の高める大きな成果を生んでいる。さらに、図様の生成と継承の様態について論述は、ときに詳細な分析の手続きに論点が埋もれがちな箇所や問題の構造把握が不十分な箇所も見られるが、物語に根ざした画の読み方・読まれ方について多くの示唆を与えるものとなっている。たとえば、軍記物語の絵画化と享受の潮流を描き出す試みが、美術史のみならず文学研究の領域にとっても大きな意義をもつように、論中で提示された豊かな問題系は、文学研究でも共有されてゆくことが予想され、今後の議論の深まりを準備しているといえる。

以上、合戦絵の全体と細部を交差させつつ議論を深めていく本論文は、誠実な基礎研究としての美質をもつと同時に、軍記物語の絵画化を合戦絵の展開と分かちがたいものとして対象化し、その解明を志向している点で高く評価でき、論文審査担当者四名は一致して、博士（美術

史学) の学位を授与するにふさわしいものと認めた。

論文審査主査	島尾新	教授
	荒川正明	教授
	佐野みどり	特別非常勤講師(国華社主幹)
	鈴木彰	特別非常勤講師(立教大学教授)